

〈研究ノートから〉

『文正草子』の本地

青木 晃

一

昨歳暮、奈良春日おん祭で細男舞を観た。夕闇の中、醜面を白布に覆うて舞う磯良に接するのは、久方ぶりであった。

海人族の神磯良が大和春日社に祝われていることは、八幡神の縁起類にある。即ち、『八幡愚童訓』^{註1}にはその住処を常陸国鹿嶋の海としながら、『八幡宮御縁起』(室町時代物部集、第二)では「磯良と申は、筑前国鹿の嶋の明神の御事也。常陸国にては鹿嶋大明神、大和国にては春日大明神、是みな一躰分身、同躰異名にてまします」とあり、『琉球神道記』(「鹿嶋明神事」)なども同説である。要は、この三社が同一神の信仰

に結ばれているということなのである。

そこで、この地盤に立つと、容易に説み解けてくる物語を思い出した。鹿嶋明神(常陸)の申子として授けられた美しい女子と、見ぬ恋の成就を願って春日明神(大和)に参籠する都の若き貴紳と、やがて結ばれてめでたしめでたしの物語『文正草子』である。

俗にお伽草子と呼ばれる草子群の、広く流布した渋川清右衛門版如きものは、細部に本来の描写を失って意義不明部を生じ、大略の物語になってしまっている場合が多い。『物くさ太郎』^{註2}について、その口説の小歌もじり趣向と、構想の善光寺縁起仕立てとは、既に私に愚考を披露した。『文正草子』の場合は如何か。

(二)

昭和五九年一月、フォック美術館の「別本ふんせう」が公刊された。口絵図版にみる美しい絵巻三巻である。絵はさておき、その本文に注目する時、「正文草子」成立の本来の型がみえてくるように私には思われる。その一端を、次に例示してみよう。

冒頭に、天照太神が御孫瓊杵尊に三種神宝をあたえて秋津洲へ下す時、その先払いとして悪神退治のため齋主命・健甕槌命を下したと述べ、この二神が下総国香取大明神と常陸国鹿嶋大明神と今に鎮座ましますと語る。ところで、この二神の關係として面白いのは、後に子なき文正夫婦が申子の願いを香取に込めた時、文正の夢に「そのかたちやしゃのごとくにすさまじき人の、こがねのほこをよこたへ、ふうふの枕にたつて、

吾は、これ、このやしろにつかへて年久しきいそらといへるものなり。然るに、なんぢらがきせいする所、たうしやの御ちからにかなふべからず。かのひたちのかしまの明神と申は、一たいぶんしんの御神なり。すみ

やかに、かの御やしろにまうてゝいのり奉れ。
しよぐはんじやうじゆすべし。

と神託する詞である。香取は無理でも、一体分身の鹿嶋の方に折れと云い、この申子譚は鹿嶋明神のものとなる。鹿嶋の森の奥には「かなめ石」が祝われ、この石の本を篋にて穿れば虫が出で、その数によつて幾人の子を育てるか占うと土俗の説にあるという。やゝ小ぶりの同じ石が、香取にも祀られてはある。

さて、水晶の玉と共に与えられた鹿嶋の託宣により、正月七日若菜つむ日に姫君「わかな御前」を、次に「しら玉姫」を授かる。父文正は非常に喜び、大切に育てたのである。この申子譚要素の中に、この草子の本質がみてとれると私は考へる。下総と常陸の香取・鹿嶋両社の創建から、香取に仕えるものとして磯良が登場し、その神託通り長者文正夫婦には美しい二姫が授かるというのは、本来香取社の、広くは鹿嶋信仰圏の靈験利生譚である。そして、それは八幡縁起譚の世界に属する。うばが夫婦に申子祈誓をすすめる時、かの瀧野長者が字佐八幡に折つて玉よの姫を得た先例をも語っているではないか。

洪川版（汎布本）が磯良の登場を消し、香取の名を失する

時、八幡縁起の世界は消失されてしまったのである。

(三)

鹿嶋の大宮司たゞみつはならびなき長者で、その家中に下
藤文太は召仕われていた。特に目をかけられていた筈が、あ
る時「思ふ子細」ありと云つて大宮司殿から追放される。

さまざま出た文太は、下総国こくほという所の塩屋老夫婦
のもとにたどり着き、身を寄せる。この「こくほ」であるが、
香取社の南方、利根川川口に近く久保・大久保なる地名が存
する。この附近か。「ぶん太が塩」は、若がえりや息災長生
の効用ありとて長者に成り出で、「一国の中ことの外に
はんじやうし、こくほのうらの在家には有徳ならぬ人もな
し」と語られて行く。

そこで、塩焼き文太は名を改め、ゆふきの文昭（常）つねをか
と名告るようになる。結城郡は、今茨城県に属するが、本来
下総国であり、そこに小塩郷や塩本の地名が山野中に存する
ことは、何か関連があらうか。その中心に、俗に結城寺と称
される金剛宝寺があつて、利根川を廻る川畔の香取社（末
社）も近い。角折の霜水寺（注）とともに、興味がもたれる所であ

る。文太の塩は鹿嶋の明神に奉納されたとはいいながら、こ
の物語の舞台は本来下総国に、香取明神社にまつわるもので
はなかつたのだろうか。

渋川版本にいうつのをかが磯は知らぬが、角折（つが）の浜のこと
かといひ（「常陸国志」）、角折の長者屋敷は塩売文太の住んだ
跡であつて、そこに住む百姓は毎年鹿嶋神宮に塩を奉納した
というところある。この鹿嶋灘に面した海岸線には、武井釜・京
知釜・上釜など塩釜が置かれたであろうことに直接関連しそ
うな地名が現存している。伝承に於ける文正の長者屋敷跡が、
鹿島郡内にあるべきか、結城郡内にあるべきか、一概には決
めかねるが、これを民俗伝承にのみ求めるのではなく、寺社
縁起の世界にさぐるべきことを重ねていいたい。

ここで些細なことを申し添えるなら、渋川版本には、文
太（注）の女房が何時の間にか登場して来ていて、不自然なので
ある。我々の想像の世界では、大宮司家を追われてたどり着
いた塩屋夫婦のもとに一人の女（おとめ）があつて、これと一緒になる
のが自然であらう。「別本ふんせう」絵巻では、そのように
展開しているのである。

また、鹿嶋の神に祈つて子を授かつた時、それが「八か国
にすぐれたる男子を生み給へ」の望みに反し、「いつくしき

「姫」であつたと知り、文正は腹を立て、

約束せしかひもなく、女を生みたることよ

と、渋川版ではしかつてゐる。しかし、「人の子に姫君こそ末繁昌」と諭されてかしづき、この姫子の縁で文正めでたしめでたしの物語になるのは周知の通りである。ところが、別本では、中巻前半に申子諱の経緯が種々あつて、正月七日若菜摘む日に玉のような姫君（若菜御前）が授かり、文正はなのめならず喜んでゐる。ここは、明らかに渋川版の方が一ひねり趣向をこらしてゐると認められよう。

姫の名（固有名詞）も、渋川版が蓮華御前と蓮、別本は若菜御前としら玉姫で異なる。

四

常陸（あるいは下総）国の美姫の噂に、見ぬ恋におちる人も二位ノ中將殿（十八歳）と二位ノ中納言さねみつ（二十歳）と、ややずれる。そして、恋をもとむる東下りの供人も、兵衛佐・式部大夫・とうまのすけ三人と、主水佑利久・はだの府生よりとを・清民部のせうきよくに・左衛門佐よしたゞ四人と、大いに異なるのである。この事実に着目すると、物語形

成の系統を異にする幾種かの「文正草子」（塩焼き文正の物語）があつたのかもしれない。

ただ、この「別本ふんせう」絵巻の場合、前ノ関白ノ御子二位ノ中納言さねみつはよき北の方を求めて御氏神なる春日大明神に参籠、その夢告を乳母の兵衛佐共々得て、旅立つことになるのである。このくだりが、渋川版等流布本ではすっかり欠け落ちてゐる。再説、この春日明神と常陸の鹿嶋・筑前鹿の嶋明神とは一体分身の神なのであり、従つて春日社に参籠して常陸鹿嶋の申子姫を折るといふのは、実によく通ずる心と理解された筈である。見ぬ恋に、ただ東へと旅立つのは唐突で、心の地平が感得されぬ。

春日野のゆかりの夢ぞあづまぢの

そのふにをふるはるのわかなは

これは春日夢告の和歌、足柄山中に行会つた八句に及ぶ鳩杖の老翁の歌は――

春日野のとぶひののもり出でてみよ

いまいくかありわかなつみなん

足柄明神の示した瑞相であつたと物語られるのであつたが、この二首は渋川版本類にみえないものである。

その他にも、「文正草子」の歌について、その構成にまで

かかわつて、いふべきことがあるように思われる。また、商人姿になつて東へ下つた一行の物売りの声、化粧詞についても詳細に見てみたいと思う。要するに、随所の詞(名詞中心)を詳解することによつて、この物語の成立にかかわる種々相が見えてくる筈であり、その稿は他日にゆづつて実現したい。

(五)

『文正草子』は、田舎の塩焼き長者文正が上洛、立身出世してめでたしめでたしの物語であることは間違いない。しかし、その基本構造(枠組み)は、大きく八幡縁起譚の世界が覆つていて、その中に申子譚と求婚譚という二つの小宇宙が存在し、物語を形成する趣向要素をなしていると言解すべきであろう。

神功皇后が三韓を攻めんとて軍評定の為に天神地祇を請じられた時、常陸の鹿嶋の海底にあつて初め一人応じなかつたのが阿度部ノ磯良であつたと『太平記』^{注7}までが記す。

其貌ヲ御覽ズルニ、細螺・石花貝・藻ニ棲蟲、手足五體ニ取付テ、更ニ人ノ形ニテハ無リケリ。

とその醜面が叙されて、よく知られた信仰世界があつたと思わざるをえない。この話には高良明神も名がみえ、時に神功皇后の胎内に宿つていたのが八幡大菩薩であつてみれば、これは明らかに八幡縁起の世界といえよう。磯良は龍宮城へ使して、干珠・満珠を借りもたらしたことを申し添えることも出来る。

文正は、信仰心厚く、正直にして忠孝、慈悲礼儀を重んじ、力もちの働き者、彼が海の恵み塩焼きによつて致福を得た物語はとても中世的であると略言できる。遂に、上総・下総・常陸三か国の国司職を得て終るが、これは物くさ太郎の甲斐・信濃両国司職を得た場合と同趣でもある。

注1 甲本。岩波版日本思想大系『神社縁起』による。

注2 拙稿「物くさ太郎の口説」(関西大学「国文学」59号)

注3 拙稿「物くさ太郎の枠組み」(甲南女子大学「甲南国文」

37号)

注4 京都大学国語国文学資料叢書別巻三、臨川書店刊。

注5 『里人談』(大日本地名辞書による)

注6 天狗爪・駒角・須弥石と共に、『文太記』二巻を蔵すると

あるが、今はない。

注7 巻三九「神功皇后攻新羅給事」(岩波版日本古典文学大

系本による)

(九〇年一〇月迄)

(本学非常勤講師・関西大学教授)